

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

「死ぬものかこんな馬鹿げた戦争」と征きし従兄弟の無念の八月 (木祖村) 佐々木千代子
白鷺が揃った稲穂の間からほつれたタオルの糸のようにも (安曇野市) 散歩好き
不慮の事故不測の災害に遭いし人ら「よいお年を」 「よいお年を」と言い合いし人ら (上田市) 田名綱 剛
トラノオが無邪気に咲いて夏がゆく整わなくともよいではないか (佐久市) 高橋衣里子
まにあわぬ一暴ペースに身を投げる玉砕の日よパンザイクリフ (安曇野市) 細川 恒
十余年生家の草を刈りし日々暮しまい終え更地を見つむ (長野市) 野 菊
かき分けて茗荷畑に立ち入れば雨窓のとき細き芽を折る (信濃町) 吉沢 英夫
治癒しても夫は終日バジャマなりバジャマは入眠儀式でありしを (飯山市) 市村紀久子
北海道の夜をひきずりゆくとき走りき各駅停車「からまつ」 (長野市) 原田 浩生
差し出した手と手を繋ぎ老夫婦「わ」わする掌生き抜く力 (長野市) 河口 武矩

佳作
朝一の水道水は温いまま祖母が嫌いな八月の初め目の前の道を塞いでゆつくりとトットトットと方ラスはスキップ (佐久市) 桜山 康子

第一首、従兄弟と同じ思いを抱え、同じように戻らなかった多くの若者たち。その思いの高さをあらためて思う8月。第二首、羽毛がそよと見えたのだ。綺麗すぎずに新鮮な喩え。第三首、「不慮の事故不測の災害」が続いている。「よいお年を」は不幸な偶然や天災の前に無力な人間の切実な祈りなのかも。第四首、思うままに広がって咲くトラノオ。そんなふうにも人も整わなくていい、と。

小池 光 選

病から解放されたら旅に出よう美しき街アンダルシアへ (佐久市) 高橋衣里子
朝のウォークに道辺の切り株を誘ふ年輪数へ坐して語らふ (伊那市) 堀米 好美
こんなにもちひさく華奢な文机で「ころ」を書くか漱石先生 (安曇野市) 細川 恒
小説を読むことに倦みこのころの快は短詩の簡潔にあり (東御市) 竹内 幸彦
叶はざりしとき娘との旅思うとき沖繩の海の碧さかなしき (小諸市) 篠原 昭枝
敗戦日球児の黙祷その向こう出陣学徒に雨降り止まず (上田市) 田名綱 剛
ゴーヤ棚羽音をたてて虫達が黄色い花をちよんちよんとする (長野市) 宮崎 邑
円空の彫りし数多の木端仏に父に似たる御仏ありし (箕輪町) 向山 政俊
病い得て酒のすすめ夫の前に熱帯夜ゆえビールをちよつと (長野市) 佐藤 洋子
山小屋の穴だけのトイレこわくって娘はそれから山には登らず (長野市) 島田 怜子

佳作
小さな大きな子について手をつなぐ集団登校の列を見送る (佐久市) 駒村 元方
「夏休み」この一言が運び来る癒し安らぎ少年の日々 (飯田市) 矢崎 俊一

第一首、病が癒える。これにまさる喜びはない。元気になったらアンダルシアの街を、野を歩こう。切実な夢と希望にうたれる。第二首、毎朝の散歩。切り株があって年輪を数えて、座る。相当の年齢を経た切り株だろう。親しい友人のように切り株が思われるところが斬新だ。第三首、漱石の机をどこかで見る機会があったのだろう。ほんにつつましい小さな机。大傑作はここから生まれた。

小島 なお 選

朝よりも重い靴と帰る日にスマホの中で待つてるコント (松本市) 川村 聡子
階段が影をたたんでくれてある歩道橋へと上げる肉体 (長野市) 原田 浩生
ついさっき話したことを忘れたり袖を通さぬ白いTシャツ (安曇野市) 細川 恒
牛飼座ありて畜養座のない不思議食は天の虫と書くなり (安曇野市) 一志みゆき
強すぎる日差しに鉢落けゆきて差したる日傘前かがみなる (朝日村) 武田 幸
言い合える顔の間を秋風がすり抜ければ我に返りぬ (長野市) 南郷 修二
こんな世にカテキョのチラシに顔出して合格生徒しかも名入りで (長野市) 伊藤 恵子
夜の動物園お盆休みに見られます夜行性にはなれないわたし (長野市) 渡辺 和代
キティちゃんドラえもんたち「ミ」なりお別れをする被災地の空 (上田市) 矢島 美穂
宵闇の城址突つ切る子の担ぐ竹刀や袴姿のまゝに (小諸市) 加藤 陽介

佳作
鯉フライの骨どうやって取るのかと海無県に住む者の不思議 (坂城町) 春日 武
稲の花開きたる日を喜びし母の姿はこの時にあり (飯田市) 矢崎 俊一

第一首、持ち帰りの仕事がある日は靴も気も重い。今日のタスクを全て終えたらコント動画を観ようと決めて。第二首、道路を渡れば楽だけれど。たたんでくれた影の分だけ身体が軽くなるといい。第三首、忘れてしまった話にも白いTシャツにもぽっかりと清々しい風が通ってゆく。第四首、もし畜養座があるとしたら春の空だろうか。桑の葉を食む音が幻の天から聞こえてくる。